お伽草子における異類物の文学的意義

―動物物（どうぶつもの）を中心に―

長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科

穆　雪梅

論文内容の要旨

小論において、お伽草子における動物物の文学的意義をめぐって、主にお伽草子にはなぜ動物物が多いかをはじめ、お伽草子に擬人化された動物の描かれ方、及び『雁の草子』、『木幡狐』、『玉水物語』の 3 作品に主眼を置き、それぞれの作品としての特質、及び文学的意義について検討した。そしてお伽草子と『聊斎志異』との比較を通して、日中伝統文化における、それぞれの動物観、異郷観、他界観を考察した。

序章では、研究動機やお伽草子の定義、分類等を述べた。

第 1 章では先行研究を概観し、研究目的について述べた。

第 2 章では、まず、お伽草子と説話集の動物が登場する作品数と登場する動物の種類、数を調査した。その結果としてお伽草子の動物の作品は説話集より多いことが明らかになった。なぜお伽草子には動物の作品が多いのか。なぜ当時の作者は動物に目を向けるようになったのかを検討した。お伽草子の動物物は貴族、武士から、庶民まで各階級の人々の様子が現されるほか、時代変化による社会の諸相を赤裸々に反映している。文学の変化の背景には、社会構造の変化があると思われる。即ち、古代の貴族社会から、中世の武家社会への変動によって、多くの動物物が誕生した。こうした社会変動が文学に与える影響の一端を明らかになった。例えば、武士社会で戦乱が増え、動物の争いとして婉曲的に表現する要求が高まるかもしれない。そして動物物の世界のみでもお伽草子の時代の社会史、宗教史、民俗史、絵画史を窺うことができ、お伽草子の動物物はお伽草子にとっても文学史に於いてもいかに重要で、かつ大きな意義を持つかは言うまでもないだろうと論じた。

第 3 章では、動物物の作品の本文と挿絵を通して、擬人化された虫類、魚類、鳥類、獣類の描かれ方について考察をした。擬人化された動物の描き方として、7 段階に分けられる。4 類のうち擬人化された虫類の描かれ方が、動物の中では最も豊かであることが明らかになった。そして、先行研究との異なる点として小論では、お伽草子の異類の中の動物のみを主眼に考察した点である。また、先行研究では指摘されていなかった故、小論で新たに考えたものとして、擬人化された動物の描き方は、主人公であるかないかによっての特徴もみられる。動物の擬人化は、行いや服装だけではなく、姿勢や、武器、杖等手に持っている物や、住居等も人間世界のように描かれており、動物とは思わぬような描き方であることを論じた。擬人化された動物の描かれ方を明らかにすることによって、当世の絵画史が窺える。

第 4 章では、『雁の草子』について、なぜ雁は人間の男性に変身するのかを考察し、雁の登場する意味を通して、本作品の文学的意義を究明した。先行研究では、女主人公の出家を「幸」と見るか、「不幸」と見るかで見解が分かれる。筆者は、彼女の「幸」、「不幸」について、石山寺での祈願と同寺における男（雁）との出逢い、男性との離別と死別を通して女主人公が、迷っていた出家を決意し、往生の本願を遂げたと理解できるので、彼女の生涯は「幸」であったと考察した。そして、女主人公が「幸」を獲得できたのは、石山観音の御利益のお蔭であり、そこには、石山寺信仰での紫式部伝説の投影もあるとした。更に、異類の雁と人間の女性の結婚は、この世では儚く終わっても、動物と人間との境界を乗り越え、あの世で結ばれ、幸福になったという点で、本作品は「美しい物語」として、成功していると評価できようと論じた。

第 5 章では、主に『木幡狐』と『聊斎志異』における動物の住処である異郷について考察、比較を行い、それぞれの特徴が見られた。『木幡狐』の場合は、狐の世界は異郷の一つとして、描かれていることと狐の変身前・離別後、元の狐の世界にいる。それに対して『聊斎志異』の場合は、狐の住処（異郷）は、人に見せかける場所としての存在にすぎず、本来の狐の世界の住処（異郷）ではない。これは、日中の伝統文化における異郷に対する認識の差異によるものであり、動物観、異郷観の相違であろうと論じた。また『木幡狐』の冒頭部から狐と人間の男性による恋愛譚であるという設定は実に稀であり、人間と動物という俗と聖、人間界と異界という世界の隔たりを超えた愛を描いた。主人公の出家は異類と人間という境界を越え、あの世で永遠の夫婦になるという中世の他界観、宗教観が窺える。『木幡狐』は、異類婚姻譚において、純粋な恋愛譚としての特色も作り出した作品だと解釈できることを論じた。

第 6 章では、『玉水物語』と『聊斎志異』の「封三娘」の影響関係の有無について、再検討をした。先行研究では、『玉水物語』は恋愛物語、「封三娘」は女と雌狐の友情物語とし比較をした。それに対して筆者が『聊斎志異』の狐に関する作品の調査、「きつね」の表記、本文の内容の考察を通して、「封三娘」は『玉水物語』と同様に人間と狐の一種の純愛物語と見なすべきだと指摘した。その上で、2 作品の共通点、相違点を比較し、両者の直接の影響関係の有無を証明することは困難であるが、『玉水物語』と「封三娘」が、登場人物の振る舞いや、物語の構成・展開において酷似していることは否定できないと思われることを論じた。更に、「封三娘」(『聊斎志異』)、『玉水物語』からも日中伝統文化における、信仰、他界観の相違が見られることも指摘した。

終章では、本研究の成果のまとめと今後の課題について述べた。

総じて、動物物はお伽草子の一翼を担う物であり、動物物はお伽草子の色彩を増すばかりではなく、お伽草子にとってなくてはならない存在として重要且つ不可欠であろう。お伽草子は中世を反映するものであるが、動物物も中世をそのもの反映していると言えよう。よって動物物はお伽草子においても、文学史においても、重要な位置にあるであろう。

本研究では初めて、お伽草子と中国の『聊斎志異』における動物観、異郷観、他界観を比較した。お伽草子にとっての動物物の意義を総合的に考察した。現代は環境思想などとの関連で、人間中心主義が問い直されており、過去の動物観を再考することは現代の課題にも示唆を与えるであろう。今後の課題としでは、日中伝統文化におけるアニミズム精神の比較などがある。